

Boys, be Romantic !

東京芸術大学オペラ科教授 大町 陽一郎

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：大町先生は日本人として初めてウィーン国立歌劇場の指揮者になられました。音楽家への道は幼少のころに始まったのでしょうか。

大町：昔、私の家に片面だけのレコードがたくさんありました。三才の私は蓄音機のふちに手をかけ、リズムにあわせて足を屈伸させながら繰り返しそれを聞いていたそうです。後に、その針がすりきれるほど聞いたレコードはトスカニーニ指揮のベートーベン「運命交響曲」とカルーゾの歌う「リゴレット・女心の歌」だとわかりました。これは身に染みこんでいます。

やがて小学生になりピアノを習いに行ったのが、独特の音楽教育で有名な呉泰次郎先生でした。先生はまず、英語で“Boys, be Romantic!”と書き、音楽家はこれではなくてはだめだぞと言われました。ピアノと同時に、すすめられて作曲も教わり、10才のリサイタルの時、自分の作品でプロのオーケストラを指揮しました。

佐多：始めは作曲家を目指されたのですね。

大町：ええ。芸大の作曲科に入り、副科で指揮法をとりました。そのころN響の常任指揮者でウィーンから来られたクルト・ヴェス先生に「あなたは指揮の才能があるから、ウィーンに行って指揮の勉強をしろ」と言われたのです。先生にドイツ語のレッスンもしていただき、ウィーンの国立アカデミーの指揮科に留学しました。H・スワロフスキー教授をはじめ、カール・ベーム、カラヤン、フェラーラに師事し、帰国演奏会で日本フィルを指揮したのが60年のことでした。

佐多：近年日本人の演奏家が多数、国際的に活躍なさるようになりましたが、とすると、あまりにも正確すぎて冷たいという評判があるそうですね。

大町：日本のオーケストラがヨーロッパに演奏旅行をした時の新聞批評はだいたいがそうですね。“クォーツ時計のように精確”、“音だけが大きくて内容がない”とか、“血の通っていない氷の花”、そういう表現です。音楽はハ



おおまち・よういちろう

1931年、東京生まれ。54年、東京芸術大学卒業。東京フィル常任指揮、西独ドルトムント市立歌劇場専属指揮、ウィーン国立歌劇場専属指揮、ケルンの日本文化会館館長などを経て、現在東京芸術大学オペラ科教授。

ートなんだ、情念なんだと、彼らは日本のメカニクな演奏を否定するわけです。

佐多：それは日本人の性格とも言えそうですね。

大町：ええ。私もいま日本のオーケストラと演奏して思いますのは、日本の演奏家はコンピューターのように音符を解説するということです。音符はひとつの記号であるが、それは響きを表しているのだという感覚が日本人にはありません。

例をあげますと、ウィンナ・ワルツのリズムは1-2-3、1-2-3と三拍子、四分音符で書いてあります。この速さは一小節が60くらいですから、日本人はズン・チャッ・チャと演奏したくなる。でもウィーンの人のはズン・チャッ・チャッ、ズン・チャッ・チャッと軽快なので、日本のは重くて長い感じがする。もっと四分音符を短く弾けと言われると、目で見ても頭脳に入ってくる長さで実際に弾く長さとは違うために、日本人は情緒不安定になる。ところがウィーンの楽員さんはそれを一つの響きとしてとらえているから、

VITALITE

インタビュー



ワルツをするときの一番ウキウキしたリズムにするには、実際に書いてある長さより短く、しかも強く、切れをよくしなければならないという感覚がある。日本人はすべての記号を忠実に読み取ろうとする能力が高い、確かに精確だがそれは本当に音楽だろうか、と言われてしまうのです。日本人は西洋音楽を記号から入って研究しているわけですが、完璧に。ですから伝統に基づかない現代曲はすごくまい。リズムが複雑で音の跳躍が激しいようなところを苦もなくやってしまいます。逆にヨーロッパの人たちは現代音楽は苦手です。心がついていけないから。結果的に、日本人は彼らの音楽とは似て非なるものを行っている。それはどこから来るかというと、それは日本人の天性から来る。

つまり日本の社会では、突出して他とのバランスをくずすということは、気持ちとして許せないのです。ですから日本の演奏家はベートーベンの「運命」も中庸に弾いてしまう。ベートーベンは「運命が戸をたたく」、ものすごく激しく「タタタター」とやってくれと書いている。僕がブレーヤー全員に、髪を振り乱し気もふれんばかりに演奏してほしいと思って、「もっと激しく」「もっと激しく」と言っても、それは彼らの美学に反することなので、「そんな大きな音を出していいんですか」と言われることもある。突出しないことが大事、みんながごちんまりしている。これが日本人。

佐多：なるほど。それでは先生は、このインタビューの主題でもある「生命力」という言葉に、どのようなことをお感じになりますか。

大町：そうですね。南極犬のタロとジロのことを考えますと、生命力の強弱と生き延びるか否かということの間には関係があるでしょうね。それに生命力の旺盛な人はよく食べ、体が暖かいように思います。

僕は最近、気功に興味をもっているのですが、手のとても暖かい人、気のでる人がいますね。お餅やおにぎりを

食べると元気が出るのは、この気を入れて練ったり握ったりしているからではないかと、この齢になって発見したんです(笑)。

佐多：日本人の生命力増強法ですね(笑)。

ところで音楽における生命力とは、何でしょうか。

大町：うーん、それは難しい。しかし、指揮者はまずオーケストラのメンバーに感情の移入をしますね。彼らがアンテナを張って僕の方から何かをつかもうとしているのが分かる。例えばもし僕が繰り返しを間違えて、譜面には書いてないのに先入観によって、「こう繰り返し」という気を向けると、楽員さんは僕と一緒に、間違って繰り返し弾くんです。指揮者があやふやになるとオーケストラもあやふやになる。それくらいオーケストラと指揮者は密接なんです。そうして、ある演奏会である演奏をしてだんだん興奮して来ますね。最後に圧倒的な音響で終わると、ワーッと感情が高揚してきて、聴衆はブラボーと言いたくなるんです。それは生命的高揚と言って良いかもしれませんね。

オーケストラの人たちに指揮者の条件を聞くと、歩いて来て指揮台の上に立つだけで、その人がどういう指揮をするかすぐわかるそうです。本能的、動物的なものですね。私も歌手のオーディションを頼まれますが、顔を見ただけで歌わなくても分かります。本当に声の出る人は容貌も体格も全然違います。

佐多：そういったことは、他のジャンルの芸術でも同様なんじゃないでしょうか。

大町：だと思えますね。それに一芸に秀でた者は修練のたまものによって、お互いにピーンとくるものがありますね。ジャンルが何であっても、いろんなところに共通のものがでてくる。私は音楽家同士の集まりより、芸大でもむしろ美術部の先生たちといろいろな話をするとき非常に得るところがありますね。私は音楽芸術だけが好きなのではなくて、芸術全般に興味がありますから。